

平城京東三坊大路側溝出土の大型人形

平城宮跡発掘調査部

東三坊大路東側溝（6AFB区SD650）の調査成果は、すでに「平城宮発掘調査報告VI」として刊行したが、未報告の木製品があったのでここに補足しておきたい。

大型の人形が2点ある。1はほぼ全形をとどめる全長112.7cmの長大な人形である。頭部で最大幅12.5cmをはかり、しだいに幅を減じて肩部に至る。腰部は両側から切込み段をつけて表わすが腕の表現はない。以下脚部へ幅を拡げ、脚端部は斜めに切りおとす。松の板目材から作り、一面は丁寧な削り整形をほどこすが、他面は割り裂き面を残す。墨の痕跡は認められない。厚さ0.6cm前後。2は全長52.0cm、最大幅6.6cm、厚さ0.5cm前後をはかる人形であり、頭・胴・脚の一部を欠くが原形はほぼ復原できる。大きく抉った腰部の表現と短い脚部に特徴がある。頭部は圭頭状につくり、腕は1と同様表現がない。松の板目材からつくり、表裏面とも丁寧に削り整形をほどこしている。墨痕はみられない。

SD650A出土の大型人形は、既報告の一例(877)を合せること計3点となり、平安時代初頭にみられる人形の大型化傾向をうらづける好資料といえることができる。とくに1の人形は、全長1mをこす超大型品であり興味を引く。類例としては、長岡京跡出土の全長1.5mにもおよぶ人形があげられる。これら大型の人形は、すでに指摘があるごとく(京都考古21号)、『親信卿記』にみえる「御等身人形」に相当する可能性が高く、20cm前後の小型の人形とともに、今後さらに検討を要する問題である。

このほかに、剣形木製品1と曲物容器底板1、折敷4点がある。剣形木製品(3)は、棒の一端を剣先状に尖らし剣に模したものである。下端を欠く。現存長39.8cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm、松の板目材からつくる。曲物容器底板は40.9cmの径をもち、底板Iに分類できる。両側辺を欠くが、一部に欠損後の加工痕がみられる。厚さ0.9cm、松の板目材からつくる。折敷4点は、いずれも一辺の長さ(木目方向)55~60cmにもおよぶ折敷Aの大型品である。全幅をとどめないが、おそらく方形を呈したであろう。一辺に3対のとじ孔をもち、一部に樺皮を残すが側板をとどめるものはない。木取りは柾目・板目材が各2点ずつである。(黒崎 直)

